

吉本隆明 『「反核」異論』再読のために

坂口博

はじめに

吉本隆明は『マス・イメージ論』で次のように指摘している。

原爆文学とかベトナム文学とか部落文学とか身障者文学などというものは存在しない。世界としてみればただ文学があるだけだ。そして文学は表出としてみるかぎりには、ただ関心の（強度）が扱われるなかで主題がきめられるだけである。

〔中略〕

だが現に原爆文学という現実倫理（中野孝次は……〔中略〕）は存在している。またベトナム文学という現実倫理の主張（小田実）も、部落文学という現実倫理の主張（土方鉄）も現在までに存在した。もちろんかれらは原爆文学とかベトナム文学とか部落文学とかいう文学が存在すると錯誤することで、ほんとうはそういう現実倫理の存在可能性をいいたかったの

だといえよう。これは原爆映画、原爆絵画というものにまで拡張してもよい。（『世界論』『マス・イメージ論』福武書店、84・7 ↓福武文庫版、88・5、80―81頁）

「ただ文学があるだけ」という正論は首肯できよう。「原爆文学」と名乗った研究会に参加し、「原爆文学研究」という雑誌刊行に関わってきたも、「原爆／文学／研究」と常にスラッシュを意識してきた。実体として先験的に「原爆文学」があるわけではない。ただ、吉本の批判は、もう少し先へ行く。「原爆文学」という現実倫理」とはどういうことか。「作品の生まなましい存在感だと信じられたものが、じつは事実の生まなましさだ」という錯覚が表出の内部で成り立てば成り立つほど、現実倫理の主張は強力に感じられる。そういう逆説すら成り立つようになる。わたしたちはこのとき世界の壁につきあたっている。その壁こそが重大な倫理の壁で、「この壁は理念と現実とが逆立ちしてしまう境界であり、世界（という概念）を把握するばあいに不可避的にみえてく

る差異線（ゴチは原文どおり）という。

さらに続く、「差異論」では、「現代の世界の科学的神学が消滅する過程に立ちあつてゐることを意味している。その周辺に差異線が探索される。（科学的）と（信）との二重の規範に囲まれた明るい空虚な桎梏のおぞましさと不快さは、おぞましいもののおぞましさや、不快なもの不快さと、くらべものにならないほどひどいものだ」と、「科学的神学」⇨科学的社会主義⇨マルクス・レーニン主義⇨スターリン主義への批判の上に、「科学的」ということ（信）とは同時に二重に否認されなくてはならない。そこでだけ差異線が引かれるからだ」と断言される。

吉本の言説の精確な理解は、やはり難しい。詩人的直観の言葉が、論理的展開を超えていく。（科学的）や（信）も、単なる「科学的」や「信」といかに違うのか。ここに拘泥していても、なかなか視野は開けない。ただ、難解な語句をくぐだいて言えば、「現実倫理」とは、水戸黄門での「印籠」のようなものだろう。この「原爆文学」が目に入らぬかと、啖呵を切り、恫喝を加えることへの嫌悪感であろう。確かにそれは文学の頹廢である。

一、再読にあつて——一九八二年を境界線に

再読にあつての趣旨文を以下のようにまとめた。

吉本隆明（1924〜2012）の没後、『「反原発」異論』（論創社、15・1）が刊行されたことによつて、あらためて吉本の核に関する発言が、さまざまな波紋をもたらした。か

つての『「反核」異論』（深夜叢書社、82・12）は、再読提案者にとつては、共感する事柄も多かった。それだけに、その後三十年のあいだに、何が変わったのかを「再読」のかたちで確認していききたい。変貌したのは「時代」なのか、「わたしたち」なのか、吉本なのか。共感しつつも、一九八〇年代にはいつて膨大に刊行され続けた対談本・語り本・講演集に辟易して、かえつてほとんど読まなくなった吉本の晩年三十年を辿りつつ、考えてみたい。

このように、きわめて個人的な関心からの「再読」であつて、これが原文研全体にとつて、どこまで共有できるかには、自信がなかつた。「世代」論で、すべてが解釈できるとは思わないにしても、いつの時代に吉本を読み始めたかは、重要な要素と考える。これは、もちろん吉本に限らず、あらゆる文学者・思想家、その作品にいえるだろう。

ここで吉本の思想的背景を辿るために、わたしが考える著者の名称と、初刊の刊行年月だけを挙げる。一九八三年以降には、大きな出来事・事件も並べてみた。

一九五二〜一九八二（『「反核」異論』以前）

詩集『固有時との対話』（52・8）『転位のための十篇』（53・

9）『吉本隆明詩集』（58・1）

評論集『芸術的抵抗と挫折』（59・2）『抒情の論理』（59・6）

評論集『異端と正系』（60・5）『擬制の終焉』（62・6）

『丸山真男論』（63・3）

『言語にとって美とはなにか』ⅠⅡ(65・5~10)

『カール・マルクス』(66・12)

『共同幻想論』(68・12)

『心的現象論序説』(71・9)

『最後の親鸞』(76・10)

『「反核」異論』(82・12)

※ほかに文学関係では、高村光太郎・源実朝・島尾敏雄

※『吉本隆明著作集』全15巻(勁草書房、68・10~75・12)続・

全15巻のうち3冊のみ(78・4~12)

※角川文庫版『共同幻想論』『言語にとって美とはなにか』『心的現象論序説』(82・1~3)

一九八三~二〇二二(「反核」異論』以後)

『(信)の構造』全4冊(83・12~93・12)

『マス・イメージ論』(84・7)『ハイ・イメージ論』(89・4~

94・3)

一九八六・四・二六 ソ連(現ウクライナ)チェルノブイリ原発

大事故

詩集『記号の森の伝説歌』(86・12)『言葉からの触手』(89・6)

一九八九・一・七 昭和天皇死去

『宮沢賢治』(89・7)

『柳田国男論集成』(90・11)

一九九一 湾岸戦争 ソ連邦解体

『甦えるヴェイユ』(92・2)

一九九五・一・一七 阪神淡路大震災

一九九五・三・二〇 オウム真理教地下鉄サリン事件

『母型論』(95・11)

一九九六・八・三 西伊豆土肥海岸水難事故(溺死未遂)

一九九七・一二「試行」第74号にて終刊

『アフリカの段階について——史観の拡張』(98・1)

二〇〇一・九・一一 ニューヨークほか同時多発(テロ)事件

アフガニスタン侵攻

二〇〇三 米英軍イラク戦争

『吉本隆明全詩集』(03・7)

『心的現象論本論』(08・7)

二〇一一・三・一一 東日本大震災 フクシマ原発大事故

『「反原発」異論』(15・1) ※副島隆彦・宮下和夫

『アジア的ということ』(16・3) ※山本哲士・宮下和夫

『全南島論』(16・3) ※安藤礼二

※ほかに文学関係では、良寛・夏目漱石・島尾敏雄

※『吉本隆明全集撰』全8巻のうち6冊(大和書房、86・9~88・

4)『全対談集』全12巻(青土社、87・12~89・5)『詩全集』

全7巻(思潮社、06・11~08・6)

※『未収録』講演集』全12巻(筑摩書房、14・12~15・11)『全

集』全39巻(晶文社、14・3~)

※松岡祥男編『吉本隆明資料集』第1集~第187集(猫々堂、00・

3~19・7)続刊中

一九八二年を境界線に、表現者としての吉本を前期・後期に分

けることには、異論もあるだろう。わたしにも根拠があったわけ

ではないが、ひとつに主要三著の角川文庫版刊行に象徴されるように、新左翼系の学生・知識人に限定されてきた読者層だった吉本が、一般読者（「大衆」と言ってもいいか）にも広く受容されていく分岐点となった年でもある。また、吉本も、以後、大衆文化論の批評（その延長線上での「消費文化」の肯定）に大きく変化していく。

わたし個人としても、二十八・九歳の一九八二年は大きな分岐点だった。四月の母の病死、姉の病状悪化、翌年一月の父の死と続いた年。あいだの九月には、三女の誕生もあり、兄との義絶もあった。二度と経験したくない年で、未だ冷静に、この前後を振り返ることはできない。吉本の本を購入しても読まなくなった、というより、読めなくなっていた。読む暇もなくなった時季だ。そうしたなかで、吉本が『マス・イメージ論』『世界論』で取り上げた、中上健次『千年の愉楽』（河出書房新社、82・8）を、病床の父の傍らで、ひとり看取りながら、読んでいた。「この小説を読みながら、俺は父の死を迎えるのか」と、思ったことだけは、鮮明に覚えている。

あと、結果的には、吉本を読む必要がなくなったと言える。一九七二年夏に著作集版『定本詩集』から本格的に読みだした吉本は、文学に限らず、諸問題を考えるにあたって、かなり影響を受けてきたが、この頃には既に吉本に頼らずとも、判断ができるようになっていた。いや、吉本に頼っても、判断できない事柄が多かった。一九八五年九月八日に小倉の金栄堂主催講演会で、たった一度だけ、吉本の話聞いたのも、「訣別」を決定的にしたようだ（この時の講演は、「高度」資本主義とは何か）で、『超西歐的

まで』＝弓立社、87・11に所収）。
なお、影書房の故・松本昌次は、次のように追悼文で語っている。

謂わゆる「花田・吉本論争」がそのあたりから一挙に激烈化したのである。両者にはさまれた形で、わたしは困惑し、編集者としての姿勢をみずからに問わねばならなかった。

この論争については、「花田清輝・吉本隆明論争」と傍題のある、いまは亡き好村富士彦氏の西部劇まがいのタイトルの名著『真昼の決闘』（八六年五月、晶文社）で明らかである。世上では吉本さんが勝利したかのような印象を与えたが、わたしはそうは思わなかった。（中略）

しかし以後の、「知の巨人」「思想界の巨人」と周囲からもてはやされた半世紀余の吉本さんの道程を、わたしは無念に思いかえす。それは残念ながら、日本資本主義の高度成長を総体的には補完・擁護するものとなったのではなかったか。大衆・庶民という言葉に幻惑されて、多くの知識人が吉本さんをもてはやした。残念なことではあったが、それが、亡くなる直前の原発推進の吉本さんの無残な発言とも連結したのである。（長いお訣れ——「吉本・花田論争」に対するわたしの選択」、『図書新聞』12・4・14）

松本昌次は、わたしよりかなり上の世代だが、この見解に今は同意できる。

二、三つのキーワード——三割、思い違い、シモーヌ・ヴェイユ

一九八二年までの吉本の思想的根拠は、自分なりにおおまか撫んでいたと思うが、今回の再読課題として、その後の吉本に、思想的に新たに加わったものを、わたしは辿ってみたかった。そこでは、シモーヌ・ヴェイユと「アフリカの段階」が問題系として浮かびあがってきた。日本の文学者・思想家である宮沢賢治・柳田国男・良寛・夏目漱石は、新たな対象としない。

それを、三題漸のように、「三割、思い違い、シモーヌ・ヴェイユ」をキーワードに見ていきたい。これらに積極的な根拠はない。わたしの思いつきだから、甚だしい吉本への思い違いかも知れない。

一つ目の「三割」は、一九七〇年の「南島論」からである。

神話にはいろいろな解釈の仕方があります。「中略」そのどの方法をとっている場合でも、この説がいいということはいまのところ残念ながら断定できません。プロ野球で三割の打率があれば相当な打者だということになるのと同じように、神話乃至古代史の研究において、打率三割ならばまったく優秀な研究者であるとわたしはおもっています。じぶんですそれ以上の打率があるとおもっているやつはバカだとかんがえたほうがいいとおもいます（笑）。（「南島論」70・9・3—10講演 ↓「展望」70・12 ↓『敗北の構造』弓立社、72・12、83—84頁）

この講演は、没後の『全南島論』にも、もちろん収録されている。ここは「神話・古代史研究者」と断わっているが、わたしは普遍的な研究者・思想家にも通じる事柄として、受容してきた。したがって、吉本自身も「三割」打者と考えた。この吉本自身の指摘で、信仰、十割打者と信じる吉本「信者」、吉本主義者とはならず済んだ。『「反原発」異論』の副島隆彦解説で、「吉本主義者」の脱落を云々しているが、それは無縁のことだった。また、「信」の構造は、吉本自身が解明してきたが、オウム真理教の麻原評価に見られるように、原理主義となり、現実から柔軟に思考していく方法が失われた。諺にいう、「イワシの頭も信心から」。腐ったイワシの頭でも、十分に信仰の対象になれる。また、「信」の構造は、科学信仰の構造と共通する。

吉本は、ヘーゲル—マルクスのな「発展史観」への疑問を抱きつつも、その大枠からは脱出できなかったように見える。直線的な発展より、螺旋的な歩みに注目したいが、吉本は経済的發展も、総体として大衆に利益をもたらすとして認める立場に立ち（ここは、わたしとは根本的に異なる立場だ。経済的發展↑上昇志向を軽視、というより無視、否定する生き方を探ってきたが、このことは詳述しない）、「消費」の重視へ傾いていく。

マルクスが「アジア的生産様式」を、『資本主義的生産に先行する諸形態』で導入することで、ヘーゲルの発展史観への疑問を抱いたのに似て、「アフリカの段階」を「史観の拡張」として想定していくが、これは果してうまくいったのか。違うだろう。「アフリカ」と「プレ・アジア」の区別がつかないし、そもそも、東

洋—西洋と同じく、アジア概念の多様さ、いかがわしさを批判できない。自分勝手に都合のよい解釈を許す構造になる。「神」概念と同じく、空間・時間を超える融通無碍な言葉となっている。ところで、滝沢克己は次のような挿話を、一九七一年に語っていた。

私は去る一月の（九州大学文学部）教授会に、私の講座の四十六年度臨時講師として、吉本隆明氏の招聘を提案した。ところが、縷々理由を挙げてその必要を説いたにもかかわらず、教授会はついに承認しなかった。（中略）積極的に私の提案を支持する者は約四十人中一人もなかった。（私の〈大学闘争〉——その暫定的総括、「情況」71・7↓『私の大学闘争』三一書房、72・4、78頁）

一九八〇年頃から、生前の滝沢（一九八四年六月没）も知り、著作を集中的に読む機会を得たが、吉本に対したようにはなれずに来た。その後勤めた創言社で滝沢の著書を編集・刊行することも多く、また数多の滝沢エピソードの言説を聞く機会もあったが、本人の言葉の力と、同様のことを語っても、エピソードの言葉の力のなさ（特に肉声において）を実感した。そのことを、創言社の編集者時代は考え続けていた。イエスやキリスト教聖書をとおして、滝沢の語る「インマヌエルの原事実」が、最終的に納得できないまま。「神」概念が了解できないままだった。

ただ、アカデミズムへの幻想を払いのけるには、前記のような滝沢に助けられた思いがある。

吉本も同様で、「反核」の「反」に対する違和感に共感したのだった。一九七二年以後、新左翼運動や市民運動の、「反」Antiの運動では、永遠に創造的な革命運動・文化運動には辿りつけないとは考えつつも、現実には身心ともに何もできないなかで、森崎和江や上野英信・谷川雁（「サークル村」関係）を読み、筑豊や炭坑労働を考え、その延長に吉本隆明・村上一郎（「試行」同人の関係）、別ルートから読んできた吉行淳之介・島尾敏雄・奥野健男・埴谷雄高などが、つながっていったと覚える（「反」については、『反核』異論』45頁で、黒古一夫を揶揄するように、「何でも接着できる万能薬と錯覚している」と指摘する。こうした箇所同感したと思う）。

逆に、吉本が否定的に批判した丸山真男や花田清輝を読む機会を逸したようだ。「試行」は、一九七〇年代半ばから終刊号まで定期購読し、吉本「情況への発言」だけは、毎号目を通してきた。15号までの複製版も刊行されたので、遡って全冊を入手していたが、初期の同人誌時代には森崎和江も、評論・小説などをよく書いていることに驚いた。

次は「思い違い」である。

わたしは思い違いをする。そしてあなたも思い違いをする。（中略）すくなくともフイジカルな科学を主題にするかぎり、実験や理論に思い違いの余地はない。あるとしても単純誤認だけで、意識と無意識の錯合体としての思い違いではない。

5 「思い違い 二極化 逃避」（『文芸』86・5夏季号↓『言葉

からの触手』河出書房新社、89・6、河出文庫版95・8、36頁)

この詩(散文詩)の言葉は、今回、出会った。一九八六年五月の雑誌発表だから、チエルノブイリ事故の直前の表現に違いない。事故後で実態を知つても、おそらく変わらないのではないかと考える。自然科学、特にフイジカル物理的な科学を、「思い違い」の例外とする根拠が、よくわからない。ここは、やはり科学信仰といえる世界ではないのか。その「信仰告白」として読んだ。この問題は、加島正浩・村上克尚両氏によって、十分に指摘していただけるので、わたしは立ち入らない。ただ、「核エネルギーの問題は、石油、石炭からは次元のすすんだ物質エネルギーを、科学が解放したことを問題の本質とする」(『反核』異論』47頁)や、「おれはすこしも原発促進派ではない。だが原発を廃棄せよと主張するような根拠はどこにもない。ソ連原発事故のようなものは確率的にはあと半世紀は起こらない。半世紀も人命にかかわる事故が起こらない装置などほかにない」(「情況への発言」89・2、『完本 情況への発言』洋泉社、11・11、538頁)といった言葉との整合性は気になるところである。

最後は「シモーヌ・ヴェイユ」。

わたしの知るかぎり、吉本とS・ヴェイユとの関係を主軸に取り上げたものを見ないが、晩年の吉本は、よく読んでいたようだが(『反核』異論』41頁でも、大江健三郎に見る「思想の病理」の窮極の例として指摘する)。

初期ヴェイユがレーニンやトロツキーよりは、はるかに甦えつついることは疑いえない。II「革命と戦争について」

(『甦えるヴェイユ』JICC出版局、92・2、62頁)

このように、一九九一年のソ連解体あとで、レーニン・トロツキーの革命観を超える思想を、過去にさぐったとき、ヴェイユが吉本のなかで甦ったようだ。しかし、これは七割の方に入るのか、三割なのか。わたしには前者に思える。いずれにせよ、カトリック過激派としてのヴェイユは、宮沢賢治と同じくわたしには苦手な思想家のひとりだ。

ただ、「自らの信念の強固さというのは、本格的だったらこれは立派な思想であると思える。そういうのをぼくはヴェイユから学んだように思います」(『ヴェイユの貫いたこと』08・5-6インタビュー)『第二の敗戦期』春秋社、12・10、49頁)と語った言葉には、期せずして同感した。思想家というのは、「信念の強固さ」、言葉をかえれば、「思い違い」であつても安易に訂正せず、主張を変えない思い込みの強さにあると、今は考えている。身近な「思想家」的人物もそうだし、滝沢も吉本も(ここでは詳述できないが大西巨人も)、そのように言える。核に対して、原発に対しても、(そのほかの事柄も)思い込みを貫くことで、吉本は立派な思想家といえよう。あとは、その思想的主張や内容が三割に入るかどうかである。その判断は、「読者」にゆだねられる。

おわりに

深夜叢書社の代表で俳人の斎藤慎爾は、『「反核」異論』の命名者が自らであることを明らかにしている。吉本没後も、忠実な吉本支持の師事者である。

『「反原発」異論』の命名者は誰か。吉本隆明氏が元気であったなら、この書名をすんなりと承諾したかどうか。深夜叢書版も、氏は最終的に「反核」を削り、単に『異論』とすることを提案した。それを私が「やはり『反核』を入れましよう」とかなり強硬に主張したため、吉本さんが妥協してくれたという経緯があったのである。(「流瀆と自存——深夜叢書社年代記」38回、「出版ニュース」15・2上旬号)

また滝沢の縁で読んだ田川建三は、『思想の危険について——吉本隆明のたどった軌跡』(インパクト出版会、87・8)のなかで、「ここで彼の『「反核」異論』という書物についていねいに論じることがはしない。論じるどころか、今更こんな書物は読む価値もあるまい」(第6章「戦後知識人批判」から「反核異論」まで) 291頁)と断言する。同じ新約学者でも八木誠一よりは、田川に関心をもち、田川の滝沢「原点論」批判や、滝沢の田川「イエス」伝批判など、興味深く辿った記憶があるが、最終的にキリスト教信仰を捨てない田川には敬服すると同時に、違う世界の人と考えた。清楚なプロテスタント教会に入ると落着くという田川と、菩提寺

や樹木・森に囲まれた神社仏閣や墓地で安らぐ、わたしの精神構造とは、相容れなかった。吉本思想批判としては、吉本譲りの喧嘩腰のこの言説に反して、けっこう丁寧にされている。

対照的な、ふたりの吉本隆明『「反核」異論』に触れた文章を紹介して終えたい。